戦時下の杉並消防署

●和田三丁目
原田　弘
（昭和二年生まれ）

私が杉並消防署へ配置になったのは昭和一九年四月で、私は一八歳の年少消防官であった。当時消防署は警視庁消防部に属し、本署も今の成田東五―一五、都の杉並西清掃事務所と杉並署成宗派出所の地がそれであった。

㈠　杉並防空監視哨（しょう）時代

私は消防署に入る前、杉並警察署屋上に設けられていた防空監視哨に隊員としていた。

杉並署も区役所もいずれも二階建て。とにかく三階以上の建物は青梅街道沿いの高円寺三丁目、現梅里一丁目にあった山崎薬局しかなかった。ここも戦時中軍需工場となり、防空用の暗幕などを作っていたらしい。

防空監視哨は都内数か所に設けられ、飛行機を昼夜見つけては警視庁地下一階の本部に報告する。ここから陸軍の東部軍司令部に報告されるのである。当時Jという人が署長で、馬に乗って管内を巡視していた。ここに勤めると国民徴用令が免除される特典があった。警察の経済係の前にはいつも、配給では足りなくて、加配米の証明をもらう人の列があった。

区役所屋上にはサイレンが備えつけられ、警視庁通信課から派遣されていた係員が常時勤務し、指令と共に警報を出していた。

㈡　隣組防空群への防火指導

消防官、当時は消防手と呼ばれていた。私は本署の警防係で勤務、主として隣組の防火指導ということで各町会を相棒のKという人と廻った。まず砂、トビ口、火たたき、防火用水の水は、など点検し、バケツリレーなどによる消火訓練の指導をした。このころには若い男は少なくほとんど主婦か老人部隊で、モンペをはいて、防空頭巾のご婦人相手であった。

㈢　戦時建物疎開

昭和一九年末から同二〇年になると主要官庁や学校周辺の建物を強制的に疎開といって破壊することになった。消防署も隣のそば屋をはじめ裏にあった、三省堂役員のOという家

など壊すのはもったいないので、署員の待機室に使ってくれとの申し出も空しくこわされてしまい、数千冊の本の行方は気の毒なものであった。

特に杉七小東側辺りの立派な家などなかなかこわれず、遂に全部の柱をのこぎりでひいて隣組の人々と協力してロープで引倒してしまった。

㈡　空襲火災とのたたかい

私の警防係は被害調査の係でもあったので、空襲の終わるたびにその被害を調べて歩いた。特に井草、井荻方面の田んぼの方々に爆弾が落ち、丸い池やら、すり鉢のようなちょうど白根山の火口のようなのが出来ていた。

電気試験場の東側の住宅に落ちたのは、水平に炸裂し柱一本残らず、穴一つなくふきとんでいたのは特殊な爆弾ではなかったかと思う。いずれも中島飛行機を狙ったのがそれたということだが、この辺の水田にB29がまいた伝単という宣伝ビラがたくさん落されていた。「マリアナ新報」などと印刷してあり、サイパン島で捕虜になった日本兵の写真などがのせてあったし、中には化猫の絵だとか多種多様であった。

有名な昭和二〇年三月一〇日の下町大空襲には、杉並消防署の大かたの消防車が応援出動、私も亀戸、両国など廻り、夥しい焼死体の光景を見て、恐怖の感覚が麻痺してしまった。

五月二五日と思うが、高円寺（現梅里一丁目）の空襲火災に出動した。杉十小は完全に焼け落ちており、避難民は通称〝鉄管原〟という草原に集まっている。消防車は真盛寺の水利を利用して消火活動を行ったが、ここから和田本町、現和田三丁目南側高台のため、ホースを二〇〇メートル近く延長、先端の方は圧力が鈍ってしまい十分な消火活動が出来なく、その上、毎回火災が発生すると強風が吹き、なかなか思うように動けなかったのである。

杉三小も焼け、庚申様の原にある火の見櫓が明々として夜空に映し出されていて、無気味な感じがしたのをおぼえている。ちょうど青梅街道と環七の交差するあたりであった。

ある日の空襲ではちょうど署の真上あたりで、日本軍の戦闘機がB29に体当たりをした。一瞬巨大な火焔がパッとあがり、戦闘機の姿はどこにもなく散って、後にはB29が一つのエンジンから白煙を吹きながら次第に高度を下げて、それはやがて東京湾に墜落したという。

また、一〇〇機以上の大編隊でB29が来たことがある。東部軍管区情報は「相当のB29が相模湾から帝都西部に侵入」とのこと、轟々たる爆音、恐いながらも空を見上げていると、その一機がスピードを落したと同時に墜ちはじめたが、やがてばらばらに空中分解して赤い水飴をたらしたように油に火がつき落下していった。府中の畑の中に落ちたという。次の瞬間また一機が、煙も火も出さずくるくるとゆっくり廻りながら落ちて来た。近いと思ったら久我山へ墜落、幸い搭載の爆弾は破裂しなかった。搭乗していた米兵の遺体は近くの墓

地はずれの畑の一角に四角い坑を掘って埋葬した。空襲の消火活動に出て帰って来る時は、ほとんど夜が明けかかっていた。

皆顔は真黒、目は充血して真赤、夜に帰れない日も多く、近くの地方へ疎開した家などを隊員の待機室として利用していた。特に本署の近くの大きい炭屋などかっこうの待機寮となっていた。

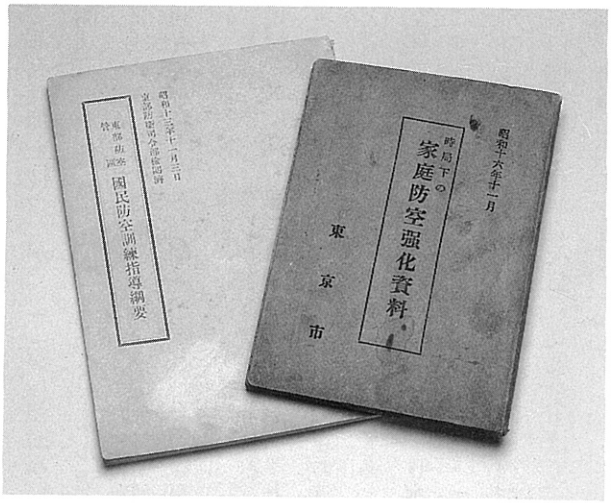
㈱学徒動員部隊

杉並の消防署へは今の東大教養学部、つまり第一高等学校の生徒が動員されて来ていた。私は同じ年ごろの彼等からいろいろ勉強の話を聞き大変有益であったし、一緒に望楼勤務をし、ポンプ操法をしたり、空襲火災には緑色の刺子を着て消防車に乗って消火活動に協力していた。そしてその合間に教師が生徒を道場に集め巡回授業をしていた。空襲警報発令時でも出動までは本を読んでいたのには驚いた。

㈾　こんなこと

昭和二〇年ごろは皆神経がぴくぴくしていたが、その例の一つとして、ある日、通行人が一本の万年筆を拾って来た。消防署の職員は、これはB29がまいた万年筆爆弾ではなかろうかと、取扱いを慎重にし、まず防火用水の中に入れ布でまいて、そろりそろりとキャップをはずした。結果は何のことはない、本物と判かり、拾い主は喜んで持っていったこともある。

警報が鳴れば警防団員が警察と消防署に参集することになっており、大変な賑いになっていた。



(左)東部防空管区国民防空訓練指導綱要　(同文館発行)
(右)時局下の家庭防空強化資料　〈提供　井口金男さん〉

町會規約

第一章　總　則

第一條　本町會ハ和泉町會ト稱ス

第二條　本町會ハ杉並區和泉町區域內ノ左ニ揭グルモノヲ以テ之ヲ組織ス

一、町會區域內ニ居住スル世帶

二、町會區域內ニアル法人、病院、工場、倉庫、營業所、事務所其他之ニ準ズルモノ

第三條　本町會ハ隣保團結シ舊來ノ相扶連帶ノ醇風ニ則リ自治ニ協力シ公益ノ增進ニ寄與シ市民生活ノ充實向上ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第四條　本町會ノ事務所ハ當分和泉町八十四番地ニ置ク

第二章　會　員

第五條　本町會ハ左ニ揭グル者ヲ以テ會員トス

一、町會區域內ニ居住スル世帶主

二、町會區域內ニアル法人、學校、病院、工場、倉庫、營業所、事務所其他之ニ準ズルモノヽ代表者又ハ管理者

前項第一號ノ世帶主會員トシテノ權利義務ヲ履行シ能ハザルトキハ其ノ家族中ヨリ選定シタル者ヲ以テ會員トス

第六條　會員ハ左ノ權利義務ヲ有ス

一、總會ニ出席シ動議又ハ發言ヲナシ議決又ハ選擧ニ加ハルコト

二、町會ノ事業及施設ヨリ生ズル便益ヲ享ケ並ニ其ノ財產及施設物ヲ共用スルコト

三、町會備付ノ帳簿、書類等ヲ閱覽スルコト

四、役員ニ選任セラルヽコト

〈「新修　杉並区史　下」より抜粋〉

私の戦争体験

●井草三丁目
福島　カツ
（大正四年生まれ）

昭和一八年ごろ今川町に転居いたしました。長女が生まれて間もないころでした。現在の荻窪病院が中島病院といって、前に大きな中島飛行機会社があり、その病院でした。弟も中島飛行機会社に勤めておりましたが、一八歳で結核にかかり亡くなりました。たった一人の弟を一八歳の若さで亡くした時の気持ちは、今でも忘れられません。当時は、結核にかかるとほとんど助かりませんでした。

間もなく戦争になり、駐在所員としての責任上、小さい子供がいても疎開も出来ませんでした。B29が飛んで来ると、子供を抱いて防空壕に逃げ込む始末でした。中島飛行機会社があり、病院の前には高射砲陣地があり、敵機はそれを狙って来たのでしょう。ある時は東の空が真赤になり、とうとう都内でも空襲を受け、やられたのかと見ているうちに、B29が一機二機飛んで行きましたが、そのうち静かな夜空が昼のように明るくなり、照明弾を落とされたことが判かり、また高圧線は切断され、水道管は破裂して道路に水が溢れ、近所の農家の防空壕がやられ、近所に分家していた人の子供さんが、安心と思って本家に避難していて生埋めになるという事件がありました。後で聞くと、西武線から荻窪までの間に三〇発の時限爆弾が落とされたことが判かり、ゾッとしました。

食べ物はなく、少しの配給品を買うにも八丁の方まで行き、行列をして買わねばならず、そのうち小さい子供が迷子になる等大変でした。道路舗装されておりませんので、道端一メートル位耕して野菜等作ったりして食べました。小さな空地でもお米を作ったりし、お米は一升瓶に入れ棒でついて、お米にはお芋等入れて御飯として食べ、米糠（こめぬか）は焼餅のようにして食べました。

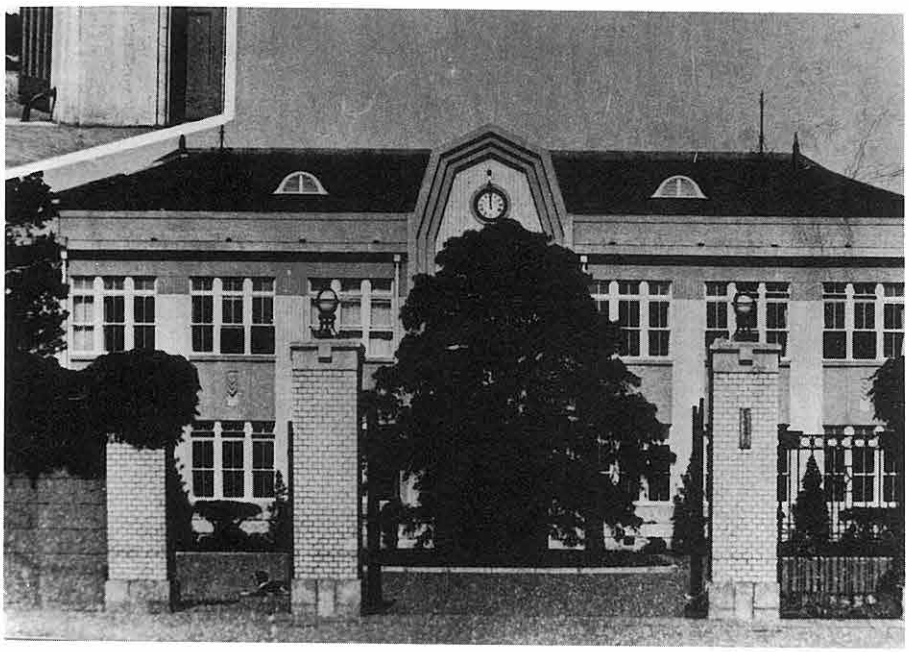
それから、広島、長崎と原子爆弾が落とされ、絶滅の悲哀を受け終戦を迎えました。米軍に占領され、米兵が来ると、私や子供たちは防空壕へかくれました。着る物もなく、あるものを工夫して子供たちに着せ、おむつ等も浴衣の古い物等を利用しました。「靴下もこうまではける妻を持ち」という川柳で、主人の名が小雑誌に出された事も思い出の一つです。物が無いので、田舎へ行って種々戴いて帰る電車の中は、人

間より荷物で一杯でした。小さな子供を座席へ座らせてほしいと思い、お願いしましたら、側にいた男の人に「冗談じゃない」とはねつけられたこともあり、子供より食物の方が大切だったのだと思いました。

そのうち下井草に転居し、アメリカの方からも援助がありましたのでだんだんと楽になりましたが、防空壕荒らしも後をたたず大変でした。また鷺宮の方に畑を借りて野菜等も作りましたが、肥料もなく肥桶を担いで行ったものです。そのころは公園もなく、子供の遊び場もなく、今でも残っている郵便局のMさんの林の中が、今のように消防署もなくて広々としておりましたので、子供たちは飛び廻って遊んでいました。

ある時、その中にある肥溜に末の娘が落ち込み、危ういところを棒が渡してあったので命拾いをしました。今はその娘も先に亡くなり、悲しみを通り越したところです。

いろいろなことがありましたが、今はほんとに幸せです。老人も大切にされ、その日、その日を楽しく過ごさせて戴き、ほんとうに感謝しております。



中島飛行機㈱　〈区立郷土博物館所蔵〉

あの日あのころ

●宮前五丁目
宮澤　一郎
（大正九年生まれ）

杉並に引越してきたのは昭和五年、私が小学校三年のころであった。

昭和一七年九月に大学を繰り上げ卒業すると同時に金沢工兵隊に入隊したが、再検査の結果、肺浸潤との事で即日帰郷となった。この翌年一八年には学徒出陣となった。

軍隊から帰され二か月休養し、一一月からは警視庁の警防課後の防空課に技手として任官し、終戦までここに勤務して様々な体験をした事を、当時日記をつけていなかったので、断片的に印象に残ったものを書いてみる。

警視庁の地下に防空本部があり、ここで情報を聞いていたとき、「敵一機が一万メートル上空を帝都に向けて侵入中」と報じられたとき、皆、航空機が一万メートルも上空を飛ぶなどということは、当時の常識としては考えられなかった。

しかしこれがB29の最初に本土へ侵入した偵察機だったと思われる。

これを機に昭和二〇年の正月以降B29による大編隊の空襲が頻繁に繰り返される。

ある日私は、警視庁の屋上に登り頭上にB29の大編隊を見ていたとき、突然雷鳴が轟くような轟音を耳にしてとっさに身を伏せた。顔を上げると、遙か彼方の有楽町方面にもうもうと数条の土煙が上ったのを見た。

早速、爆弾が落ちたと思われる銀座方面に急行する。ちょうど銀座四丁目の十字路に五〇〇キログラム位の爆弾跡があり、地下鉄の銀座駅に降りて見ると、水道の送水本管が直撃されて、水が滝のように流れ込み地下鉄のホームすれすれまで達し、線路が川のようになっていた。

警視庁の屋上から空中戦を目の当たりに見た事もあり、B29が煙の尾を引きながら東京湾に落ちる様を見たこともある。

B29の落下は杉並にもあり、このとき私は庭で目撃した。頭上にあの巨体がくるくると廻りながら今にも頭の上に落ちてくるのではないかと恐怖感を味わった。

このときの落下地点は、自宅から五〇〇メートル位離れた久我山四丁目の当時あった駐在所の裏に落ちた。

ちょうど春ごろで、これを見物するため家の前の宮前五丁目と松庵二丁目の境の道路を見物客が多数行列を作り賑わったこともあった。

空襲が昼夜の別なく烈しく続き、あの三月一〇日の東京大空襲には千代田・港・江東と東京の中心部がほとんど焼失した。

当時の記録によると、焼失戸数五一万戸、戦災者数二一〇万人とある。この夜警視庁の職員も何人かが犠牲者となった。

この朝被災地を見て廻ったが、日本橋、銀座は一夜にして変わり、昔の面影はなく見渡す限り一面の焼野原と化した。この中を、目を真赤にした被災者達が手に手に身の廻りの品を両手に下げて、どこへ行くのか、ぞろぞろと自然と隊をなした行列が続く。本所、深川の方面に行くと、まだ真黒になった焼死体がまるでモデル人形のように横たわっていた。悲惨なる光景を目撃した。

杉並地区もその後の焼夷弾による大空襲により、阿佐谷、高円寺地区の青梅街道沿いの並びが大きな被害を受けた。

この夜の空襲は今でもはっきりと脳裏に刻まれている。あの三六本入り油脂焼夷弾が空中で分解しバラバラになり、一本一本の筒が火炎を吹きながら空一面に花火のように落ちてくる。燃える火災を映した空は赤く染まり、黒い影のB29の巨体が低空で舞う。焼夷弾は次第に家の方に近づいてくる。もはやこれまでと思ったが、幸いに当地は被害を受けなかった。

西荻地域は一〇〇キロ位の小型爆弾に見舞われたが、それ程大きな被害は出なかった。

高井戸第四小学校が大型焼夷弾により焼失した。

ある夜、空襲警報発令中に家の隣に当時あった火の見櫓（やぐら）に登っていたとき、あの爆弾の落下音、ヒュルヒュルという音を耳にして、これは危ないと柱にしがみついた瞬間、目前の道路に火柱が数十メートル吹き上った。これは大型の黄燐（おうりん）焼夷弾であったと思われる。もし爆弾であったら吹き飛ばされて命はなかったろうと、ぞっとしたこともあった。このときも幸いに小舎が一軒焼けただけに止まった。

昭和二〇年八月六日広島に、八月九日長崎に、原子爆弾が投下され、多くの犠牲者を出し、八月一五日に終戦を迎えた。

職業柄様々な体験をしたが、現在戦争を知らない多くの人たちに、いかに戦争が悲惨であり、被害を被むるのは一般庶民であり、非人道的なものであるかを知り、平和の世のありがたさを感じてもらいたい。